

地域住民の感性を捉えた留萌川の地域イメージ調査

The local image research of the Rumoi river which caught a local resident's sensitivity

国土交通省北海道開発局 正員 井出康郎 貴家尚哉 加治昌秀
(社) DEC 正員 伊藤徳彦 (株)ジオスケープ 正員 ○秋田宏行

1. 研究目的

通常、人が「景観」を認識する際、その多くは五感（視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚）のうち視覚が影響しているが、聴覚、嗅覚なども、物事を察知する際には重要な役割を果たしている。このことから、「景観」を考える場合、感性を構成する五感の総合判断によって評価する必要があると考えられる。そのため、公共景観を計画する場合、事業者は公共性の対象になる地域住民の感性を適切に捉え、評価した上で景観計画を立案することが求められる。

本研究は地域住民の留萌川に対する感性を評価することを目的に、住民が留萌川に対して抱いているイメージを、五感のうち、視覚、聴覚、臭覚、触覚に関連するイメージの言葉について、アンケート調査により実施した。

2. 調査の背景

留萌川はかつて中流部から下流部にかけて蛇行と縫流を繰り返す河川であったが、下流部における市街地周辺の発展に伴い昭和 35 年頃からショートカットを主体とする掘削工事や築堤工事が実施されてきた。昭和 63 年の大洪水では、家屋浸水 3,376 戸をはじめ、橋梁流失 13 ヶ所等甚大な被害となり、これを契機に直轄河川激甚災害対策特別緊急事業が採択され、平成 4 年度までの 5 ヶ年に渡って市街地部における河道掘削や低水護岸、堤防護岸等の治水事業が集中的に行われて、現在の市街地での河川景観が形成された。近年になって護岸の破損や老朽化が目立つようになり、将来的に補修を含めて地元住民参加型の川づくりが求められている。

3. 調査方法

調査方法は、留萌市民（344 人）に対して、河川に対する感性イメージを、視覚、聴覚、臭覚、触覚についてアンケート調査を実施した(図-3)。本調査の被験者特性としては、4 割以上の人が留萌川の洪水を経験しており(図-1)、また 4 割近くの人が散歩やサイクリングなどの生活の場として留萌川を活用していることが確認されている(図-2)。

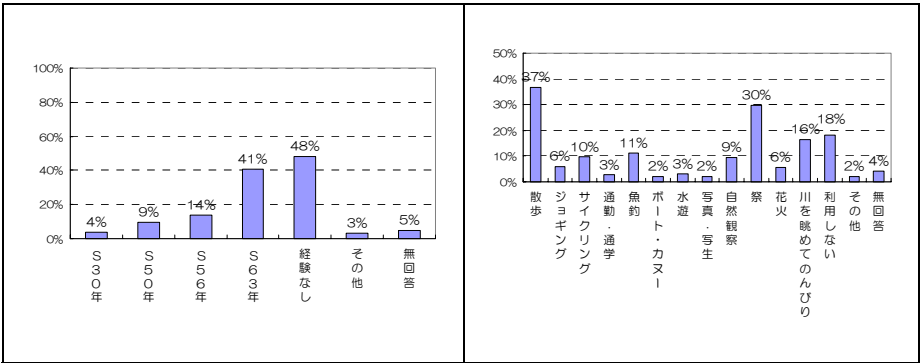


図-1. 洪水経験の有無

図-2. 河川利用方法

【質問 留萌川について感覚的なことを教えてください。】

- ①留萌川の春、夏、秋、冬を色で例えると何色をイメージしますか
1. 緑・グリーン 2. 黄・イエロー 3. 青・ブルー 4. 赤・レッド 5. 橙・オレンジ 6. 桃色・ピンク 7. 紫・バイオレット 8. 無色・クリア
9. 水色・シアン 10. 白・ホワイト 11. 灰・グレイ 12. 黒・ブラック 13. その他 ()
- ②留萌川とその付近でイメージされる音はどのような音ですか。
1. 水の流れる音 2. 小鳥のさえずり 3. 風の音 4. 草木のざわめく音 5. 人のにぎわい 6. 雨の降る音 7. 車のエンジン音
8. 機械の音 9. 人の声 10. マイクの案内音 11. パトカーのサイレン音 12. 犬のなき声 13. 感じない 14. その他 ()
- ③留萌川とその付近でイメージされる触覚はどのような感じですか。
1. 芝のふさふさ感 2. 砂のさらさら感 3. 土のどろどろ感 4. 護岸のでこぼこ感 5. 川の水のひやひや感 6. 氷のつるつる感
7. 金属錆のざざざ感 8. めれた地面のびちゃびちゃ感 9. 子犬のぬくもり感 10. 割れたガラスの粉々感 11. 感じない 12. その他 ()
- ④留萌川とその付近でイメージされるにおいは、どのようなにおいですか。
1. 草のにおい 2. 土のにおい 3. 排気ガスのにおい 4. 魚の生臭いにおい 5. 潮のにおい 6. 食堂からの料理のにおい 7. 新鮮な空気のおい
8. 油のにおい 9. 花の蜜のにおい 10. 犬の糞のにおい 11. 川のにおい 12. かび臭いにおい 13. 感じない 14. その他 ()

図-3. 視覚、聴覚、臭覚に関する質問事項

キーワード : 河川景観、住民参加、感性評価
連絡先 : 〒107-0061 東京都港区北青山 2-5-8 (株)ジオスケープ tel03-5410-2366

4. 調査結果

1) 視覚的認識（色彩）（図-4）

色彩的には、冬のイメージは雪の色である白と灰色が8割近くを占めており、春に植物の萌芽を思わせる緑系が4割弱を占め、夏には水や空を思わせる青と緑が7割を占め、秋には緑の割合が減り茶系の色が占める割合が増えている。四季を通じて全体的に寒色系の色彩が多く認識されている。その中で、特に秋には進出色の暖色系の赤や橙のイメージが多く出現している。

2) 聴覚的認識（図-5）

留萌川の音のイメージとして、多くの人が水の流れる音や風による草木の音など（静寂な中で確認できる音圧が40db以下に相当）の自然界の音をイメージしているが、そのなかでエンジン音（車の音圧が70db程度に相当）も一部でイメージされていた。

3) 嗅覚的認識（図-6）

留萌川の匂いのイメージとしては、川や植物や空気など自然界のものが多く占めているが、魚の生臭さや排気ガス等も一部でイメージされていた。

4) 触覚的認識（図-7）

留萌川の触感としては、芝生や川の水のイメージが多く、生活の中での川との関わり方が強く出ている。

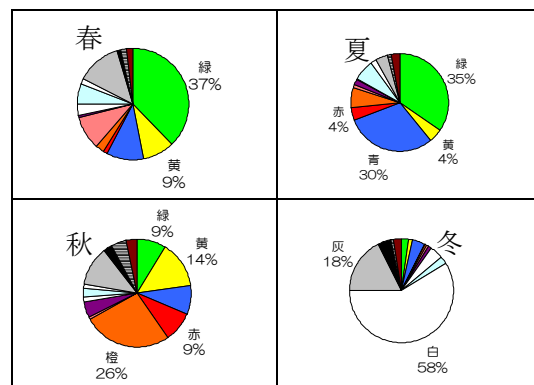


図-4. 四季で感じる色のイメージ

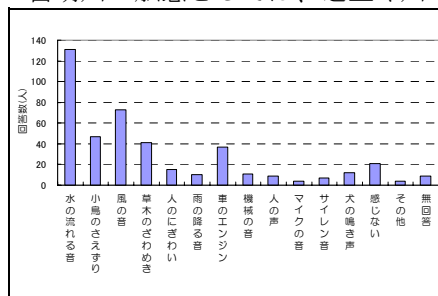


図-5. 聴覚

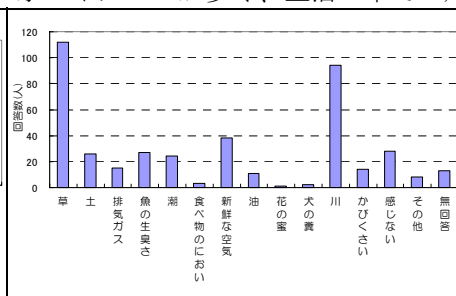


図-6. 嗅覚

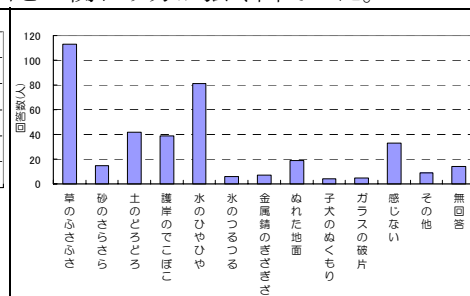


図-7. 触覚

5. 考察

感性イメージから、留萌川では、四季の変化を明確に色彩イメージとして意識されており、留萌川の河川空間は、季節感が味わえる自然の空間として位置づけられていることがわかる。また、色彩のイメージは、全般的に、暖かく感じられる暖色系（赤、橙、黄など）よりも、冷たく感じられる鎮静色（青、青緑、青紫など）といわれている寒色系が選択されており、住民意識としては河川空間を比較的静寂な空間として認識していることが確認された。

それゆえ、住民の意識としては、水の流れや風の音など自然界の静寂な、心地良い音環境に対して、自然界の音とは異なる不規則的かつ断続的な車のエンジン音等は、不快に感じるものとして認識されていると推測される。

例えば、道路に隣接した河川空間の整備を考える場合には、道路からの露出が大きい景観（図-8）は、開放感はあるが人工的で不安感をもたらす等のイメージがする。また植栽により道路との視界遮蔽をした景観（図-9）は、閉塞感を感じることから、適度な植栽により遮蔽した景観（図-10）は、調和感があり開放的な空間としてイメージされ高い評価を得ており、車に対する心理的負担が軽減されることに起因しているものと推定され、別途実施したCGイメージアンケートの結果と整合している。



図-8(ケース A)

図-9(ケース C)

図-10(ケース B)

6. まとめ

今回の調査では、人々が河川空間に対して日常的に抱いているイメージを感性的に捉えることができた。この感性的特性を河川整備のあり方などに活用していくことが合意形成を図る上で重要となる。今後、感性の分析・評価方法を確立し、感性情報を取り込んだ計画立案手法について検討することが必要と考える。

参考文献

- 井出康郎他：アンケート調査による地域住民の感性評価、北海道支部論文報告集第59号
井出康郎他：ダム景観に影響する視点場と景観要素に関する実験的研究、河川技術論文集第7巻

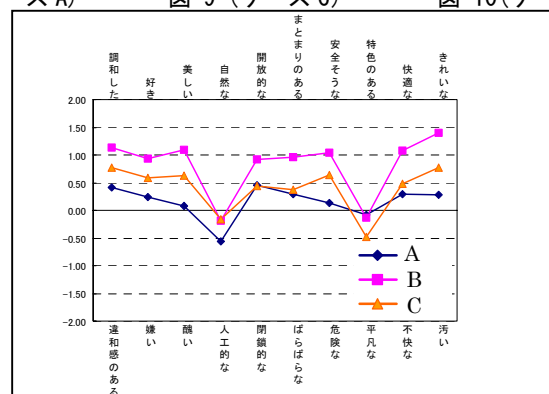


図-11